

白書とは、政治社会経済の実態や施策を分析した刊行物であり、その目的は国民への周知にある。唯一外務省のそれだけは青書と呼ばれるが、その外交青書2019年版では、なんと「北方四島は日本に帰属する」という文言が削除されてしまった。外国に侵攻を受け、不法に占拠された領土について、日本国民が「共感」を忘れないために、2月7日や、2月22日が存在する。

しかし、実態は「共感」どころか関心すらない証左だろう。

「いつか友好的に返してくれば」、そんな淡い願望と相手の善意に頼り、主体的な改善を放棄してきたのは沖縄の問題と似ている。

国家主権を預託したような日米安保がある限り、ロシアも譲れないし、米軍基地もなくならない。時折、政局が返還間近を演出しても、現行の日米安保に縛られている限り、画期的返還などありえない。

「戦争するしかない」という愚かな国会議員もいる。特異なのは酒席で議論をふっかける非常識さだ。この愚か者は、そもそも日本には戦争をする権利すらないことを理解していない。国際社会の中で戦争によって地域の現状変更を許されるのは、5大帝国に限られ、軍事行動は、国際社会の暗黙の承認（口出しできない）があつて初めて意味をもつからだ。彼の非常識な言動はともかく、「戦争」という言葉に過剰反応し、バッシングに晒すのはどうだろう。この男のタワゴトを意識すると、「侵略された島々は、普通の外交交渉では返ってこない」「善意で返還するなどあり

戦争白書 — 偽善の自覚 —

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

得ない」「戦争でもしなければ返ってくるはずがない！」ということだろう。

拉致被害者奪還のため、領土奪還のため戦争も辞さない！国会議員の覚悟として間違つてはいないが、酒席の遠吠えなど論外である。

結果を嘆いて、勇武を誇示する位なら、もうこれ以上日本の島々を、主権を、奪われないうような全力を尽くすことに執念を燃やしてほしい。

「戦争」という言葉を封印し、言葉尻に執着して否定することは、抑止力自体を否定してしまう。大国の脅威に晒される国々では「戦争も辞さない」という言葉は抑止力であり、軍事力は戦争に備えるために保有している。

日本だけは過去を反省し、「聖人君主」を気取る清らかな資格があるというのか？アメリカ商店街があるから、安心して商売に精を出せるが、商店街の警備員が人を殺すのは見て見ぬふりをする。用心棒代として、お古の！戦闘機や、お古の！陸上イージスまで買わされ、商店街を支えている。

「自分たちは戦争に加担していない」と平然とウソをつく偽善：「戦争」という言葉を狩り、反戦平和を気取るなら、まずは「イラク戦争」を悔い、イラク国民に謝罪することが先決だ。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に「概説戦後学校教育」「武徳教育のすすめ」。



美楽での連載を束ねた百念撰集
「雲涯蒼天」
定価 700円
Amazonにて販売中